

我が故郷・四平

熊本県 岩下良子

一 戦前の四平

私は、昭和三（一九二八）年九月二十八日に、満州国吉林省の公主嶺で生まれた。当時父は取引所の所長をしていたが、私が三歳になったばかりのころに転勤になり、一家は四平に引越した。それ以来、四平で終戦まで過ごし、我が故郷のごとくになった。公主嶺のことは全然記憶に残っていない。

四平という街は、日露戦争において講和条約の細目協定を締結した、歴史的に由緒のある街である。当時の名残りとして、街の北側にある丘にはロシア軍の陣地がそのままの姿で残っていた。また、南満州から内蒙古へ向かう玄関口という、当時では極めて重要な地でもあった。海抜一六七メートル、南に向かってなだらかに傾斜している地形で、鉄道距離では大連へ五八

六キロメートル、奉天へ一八九キロメートル、さらに新京へは一六キロメートルという便利な位置にあった。鉄道は満州を南北に縦走する、あの有名な南満州鉄道（満鉄）の連京線（大連―新京）の沿線で、それに平斉線・平梅線が東西に走っていた。日露戦争当時は、四平街と呼ばれていたが、四平省になってからは街の字が外されて単に四平となり、省内の中心的都市となり、産業・経済・文化の拠点として成長発展を成してきた。

戦前の街中はとても静かで、我が家のすぐ前は郵便局で、その前の広場はヤンチョ（洋車）やマーチョ（馬車）のたまり場となっていた。馬車の後にはいつも馬糞が山盛りにたまっていたが、子供たちは馬糞を踏むと背が高くなると言われて、乾いた馬糞をわざわざ踏みに行ったりしていた。私の女学校時代には、農業の時間には街に出て行って、バケツとシャベルを持って馬糞拾いをして、作物の肥料にしていた。

昭和十七年の秋になると、戦時色がとにかくに濃くなり、陸軍戦車学校と戦車団が郊外の楊木林に駐留する

こととなり、一躍、四平は軍人一色の街になってしまった。女学校でもだんだんと勉強する時間がなくなり、農作業をするか、または兵隊さんの被服などの修理作業が多くなってきた。

昭和十八年になると、学徒動員と称して陸軍病院や電話局や油化会社の三ヶ所に動員された。私は油化会社に行かされて、労務課に配属された。軍需会社であったので、会社全体が軍隊化されていて、部署・部署はすべて「い隊」とか「と隊」という秘匿略号が付けられていた。

毎日、夕暮れになると私たち女学生は全員集合させられて、円陣を組んで小隊長を真ん中にして軍歌演習をし、「いち、に、いち、に」と肩を揺らして声を張りあげていた。

そんな日常生活のある日のこと、私の同級生がバッチを広場で落としたと小隊長に報告すると、小隊長はすぐに「お前たちの連帯責任だ！」と言って、夕暮れどきの薄暗い地べたに一列に並ばせられて捜したが、とうとう見付からなかった。彼女は泣きくずれてしま

った。

部屋に入るときも「〇〇生徒、入ります！」と言うと、部屋の中から「声が小さい！」と言い返される。

今度はさらに大声を出してどなるように言い直すと、「ようし！ 入れ」と言われたものです。今、昔を思い出しても戦前は本当に良かった。

満人の子供たちはよく独楽廻しをして遊んでいた。細い棒に紐を結び付けてそれで独楽の横つ腹をたたくと、たたかれた独楽は傾きながら唸るように音をたてて、くるくると廻っている。中庭では女の子が円陣をつくって羽根突きをしていた。羽根突きは日本のように羽子板で突くのではなく、足でぼんぼんと突くというよりも蹴り上げるのです。「一、二、三、四」と節をつけながら数を数えるのですが、長く編んだ髪の毛がゆれ、赤いズボンもゆれて、その姿はかわいらしいものだった。

満人街を歩くと、まず多く目に付くのが、質屋と仕

立屋の看板で「當」と金文字で彫り込んだ板や、「成衣局」と縫い着けた旗が、黄ばんだ秋の日を受けて立てられている様は、いかにも満人町らしい情景をつくり出していた。酒屋は、錫製の酒壺を軒下に吊し、生饅頭屋の看板は紙を細く切った饅頭の模型であった。

飯店は「中西大菜」と人々の食欲をそそり、菓子や果物の店は「中秋月餅」で客を呼び込んでいた。呉服屋

は「綢緞布莊」と看板を出している旧式な店から、「自

運歐亜洋行」という近代的なデパート式の堂々たる建物の店まで、いろいろであった。屋号に至っては、漢

字の国らしく「天泰奉」とか「康徳記」などと称する

ごとくに、どの家もどの店もおめでたい屋号ばかりで

あった。満州国建国以降、それまでであった「哈徳門」

という煙草の立看板の姿がほとんど消え、その代わり

に目につくようになったのが「老篤眼藥」とか「銀粒

仁丹」、それに「森永牛奶糖」（牛奶糖とはキャラメル

のこと）などの大看板であった。だんだんと日本との同化が進んできたのだろう。

四平の中心街は、京都と同じように南と北に分かれていて、北一条通りとか、南二条通りとかに標示されていてすっきりした街並みで、その中央の背骨の地区が中央通りと言われ、歩道にはグランド楓が植えられて青々と繁っていた。市公署の前が中央公園で、五月にはライラックの花が咲き乱れて芳香を放っていた。その周囲では、満人の即席写真屋がいつも二、三人いて、客待ちでうろうろしていた。自分でカメラを持っている人は、ライラックの花に誘われるように集まっ

ては、思い思いに写真を撮っていた。

写真といえば、父の趣味はデニスとカメラで、両方とも熱中していた。特にカメラ弄りは「病膏盲」の部類であった。あるとき、姉を写した一枚の写真が、当

時の大衆雑誌の「キング」に掲載されたので、それからますます有頂天になり、カメラ扱いに本腰を入れるようになった。私が小学校三年生の年に、父はもう宮仕えは厭とばかりに役所に辞表を出して、独立し写真館を開業した。業績は順調で、戦中はもとより終戦後になっても売り食いするようなこともなく、四平での生活を全うすることができた。父の趣味が我が家の生活を支え、そして敗戦後のあの苦しい日々を乗り越えさせてくれたのだった。

このような楽土である四平にも、大変な時期があった。蒙古に近いこの地方は、春先になると一週間ぐらいいは黄砂が吹きまくるのだった。窓という窓は二重になつていたが、さらにこの時期には嚴重に目張りをした。外を歩くのも大変であつた。通学には頭からすっぽりとベールをかぶり、前を向いては歩けないので背中を前にして背歩きをするので、普通の通学時間より大幅に時間がかかった。目には細かい砂が入り痛くなり、鼻の穴は真っ黄色となつた。口の中はじやりじやりで大変だった。

黄砂が治まり目張りをはがすと、二重窓の間に砂の山ができていた。全部を掃除するところになると、ようやく本当の春がやってくるのである。

二 終戦時の四平

昭和二十年四月、私は女学校を卒業して、大連にあった双葉学園という保育専門学校に入学した。一学期を終えた七月に、大連にいた姉と甥の三人で、四平の我が家に帰省した。

運命の八月十五日、その日は、朝から「正午に重大なニュースが放送されるので全員聞くように」という意味のことを繰り返し繰り返し放送されていた。父はその重大ニュースを聞くために、今まで見たこともないくらい厳肅な面差して、ラジオの前に正座していた。そのうちに放送が始まったが、最初から最後までピーピー、ガーガーと大きな音で雑音が入り、ところどころで声が聞こえた。それが天皇陛下の玉音であつたことは、放送が終わってから知った。父は放送が終わると、タオルで流れ落ちる汗と涙をぬぐいながら、「日本は負けた。戦争が終わった！」と肩を落としてつぶや

いたが、私はまだ理解できずにいた。「神国日本が負けるはずがない！」と心の中で一生懸命に叫んでいた。

それからの四平の混乱は、計り知れないものとなつてしまった。てんやわんやの市街では、これから先への不安、来たるべき事態に対する恐怖で、日本人も満人もすべての人間は右往左往した。そのうちに流言飛語が飛び交い、混乱はますますエスカレートしてきた。三姉妹であつた私たち三人は、真夏なのに肌を現してはならぬと言われて、黒色の長袖の服を着た。一昨年下の私も、髪の毛をオカツパに切らされた。十八歳だつたが、小柄なので十四歳ぐらいに見られ、それから日本に引き揚げるまで十四歳で通した。

我が家は四平の中心街にあつた。向かい側に白系ロシア人の店があり、ハム、カルパス、ソーセージやパンなどを売っていた。その男の子は、幼なじみの友だちであつた。名前はリチカといつた。そのリチカは、左の手が半分しか無く、私は以前から不思議で仕方なかった。あるとき、ついに意を決して尋ねた。「ねえ！ その手はどうしたの？」と言うと、リチカは何

事もなかつたように「雷さまが落ちてきて持つて行った！」と言つていた。私もそれを聞いてなるほどと納得して、それからは気にならなかつた。

敗戦後、しばらくすると四平にもソ連軍が進駐して来たが、いつの間にかリチカはソ連兵の服装をして通訳になつていた。そのリチカが突然に我が家によつて来て、「ソ連兵の写真を撮つてやつてくれないか？ 私が紹介する人はみんな大丈夫だから」と言うので、父はそれに応じて店を開くことにした。だが、中には略奪組もいて、土足のままでずかずかと上がつて来ては、家の中を物色していた。

ある日のこと、私と姉がお風呂に入つていたとき、ソ連兵が断りも無く入つて来た。姉は幸いに風呂場から上がつて服を着ていたが、私は石鹸にまみれている最中であつた。母が大声をあげて「逃げなさい！」と叫んでいたが、それを聞くか聞かないうちに、反射的に真つ裸で外にある倉庫に逃げ込んだ。まさに危機一髪であつた。倉庫の中では、そこにあつたシートを頭からすっぽりとかぶつて震えていた。

どのくらい時間が経ったか分からないが、だれも呼びに来ない。だんだんと心配になってきた。父も母も、そして姉も皆殺しにされたのではないか？ そう思うとますます震えがひどくなって止まらなくなっていた。すぐに飛び出したいと思っても、素っ裸ではどうにも動きがとれなかった。約一時間ぐらい経ったかどうか、はつきりとは分からないが、姉の声が聞こえた。捜しに来てくれたのだ。服を着て倉庫から出た。恐る恐る居間に入ると、父も母も姉もみんな無事で、元気にしていた。なんとということはない。私を迎えに来なかったのは、みんな気が動転していて私の存在を忘れていたとのことで、みんなで大笑いとなったが、私は腹の立つやら悔しいやら、そして安心したやらが同時にこみ上げてきて涙が止めどもなく流れてしまった。

ソ連兵が来ると、私は辞書を片手に持って店に出ずに、黒子よろしく部屋の中から大きな声を出して通訳をしていた。「『写真代はいくらですか？』と聞いているよ！」とか、「『大きく引き伸ばしができるか？』と言っている！」などと、写真技師に伝えていた。そん

な方法で、ソ連兵と写真技師との間を取り持つのが私の仕事だった。

ソ連兵の多くは靴下などは履かずに、フェルト状の靴に、足先を白い布一枚で足の形に上手に巻きつけて履いていた。

写真を撮るような兵隊たちは、比較的素質が良く紳士的に振る舞っていたので、当初のソ連兵に対する恐怖心がだんだんと薄れていった。

ある日、リチカが来て「この兵隊さんが、日本人の娘と一緒に写真を撮りたいと言っているがどうする？私が見ているから大丈夫だよ」と言ったが、大丈夫と言っても私一人ではとてもではなく怖くて、一緒になご撮れないので断ろうと思ったが、ちょうどそこに五歳の甥がうろろうろしていた。これ幸いとばかりに、「この子と一緒にならば写してもよい！」と言うと、リチカが「それでよい」と言ったので撮影することとなった。火の気の無い撮影場に入ったが、私は甥をしつかりと抱きしめたままカメラの前に立った。ソ連兵は私の横に立ったが、毛むくじやらの手の先がなんとも恐ろし

く、虎かライオンの隣にいるようで、全身ががたがたと震えて止まらなかつた。写真は震えたままで写した。やつとソ連兵やソ連軍とも顔なじみになったころ、ソ連軍は本国に帰還し四平からも姿を消していった。ソ連軍がいなくなると、すぐに八路軍がやってきた。

「お前の家を接収する。悪いようにはしないから貸せ！」と威圧的な態度で私たちが家族を脅した。我が家には、ラツパ兵五人が居住した。八路軍は、女には手を出さないから安心しろということだったが、いや応なしに共同生活をしなければならなくなつた。我が家の五人は少年兵で、毎朝起きるとラツパの練習をしてゐた。庭で練習するので、うるさくてうるさくて仕方がなかつた。庭だけではなく家の中では、口三味線で「チータラ・チータラ！」と歌っていた。とうとう私たちも、口三味線を覚えてしまうほどだった。

四平の街に八路軍が進駐して来て一番大きな問題となつたのは、虱しつかの蔓延であつた。この有り難くない友好関係は我が家でも同じで、家族での虱退治が毎

晩の一大仕事となつた。少しでも油断をすると、翌日は大量が増えて倍以上の努力が必要となつた。

しばらくすると、国民党中央軍と称する・介石の軍隊が来て八路軍と内戦を始めたが、八路軍が負けて四平から退去した。当然に我が家の五人のラツパ兵も出て行き、やれやれとほっと安どした。

だが、それもほんの束の間のこと、国民党中央軍の將校が来て、一方的な言い方で「お前の家を後方分屯地として使用する！」と言ひ渡した。写真屋には写場と言われる広いスペースがあるのを狙つて、接収したようだ。写場は立派な事務所の様変わりした。

後方分屯地の責任者は、張進及という少佐だったが、なかなかの人物であつた。ドイツに留学した経験を有する医者で、話題の豊富なインテリだった。父たちと毎晩のように筆談で世間話やお互いの故郷の話や、映画など文化的な話を交わしてゐた。その話のなかで、終戦前に広島と長崎に、米軍が新型特殊爆弾を落とすたということを知つた。そのときはまだ原子爆弾とは分からず、その恐ろしさまでは話になかつたが、彼に

教えてもらわなかったら、引き揚げるまで原爆のことは知らないままでいたことになる。

張さんは、日本人の生活と同じような日常生活を試みたいと言い出し、それからは朝も夜も一緒に食事をするとなり、起居もほとんど同じにしていた。お味噌汁と漬物で、ご飯を食べていた。だれよりも早く食べ終わると、「こゆつくり、マンマンツウ！」と言って片手を左から右へ平らにして立ち上がり、お辞儀をして出て行く礼儀正しい方でした。特に母を大事にしてくれていた。

このようにして私たちとの生活になじんでいたころ、ある日突然に、通信隊長と称する中国人がやって来て、土足のままで家の中に入り、何かを探すような目付きで家中を見て回り、出て行った。なんの用事で来たのか、よく分からなかった。翌日、町内会長さんが慌ただしく我が家にやって来て、「困ったことになった！ 中央軍の通信隊長が、『安武写真館の娘は生意気だ！ だから今日から毎朝、掃除に来させろ！』と言って」と話してくれた。母は必死になって「娘

一人だけを行かせるわけにはいかない。だれかもう一人をつけてなら良い」と訴えたが、通信隊長は「娘だけ来い！」と言ってきかない。私は意を決して一人で通信隊長の所に行った。我が家ではその通信隊長のことを「ホックス」と綽名を付けていた。その理由は、目がつり上がり顎がとがった醜男だったからであった。その「ホックス」の自室では、「ホックス」がにやにやしながら寝台の上に座っていた。ふと見ると、寝台の上には日本女性らしき若い女性が髪をすいていたが、まったく無表情で無関心であった。「ホックス」は、まるで勝ち誇った將軍のごとき態度で股を大きく開き、踏ん返り返っていた。私を見て「マスクを取れ！ スカーフを取れ！」と指をさして指示した。私は掃除を始めた。「年はいくつだ！」などと言っていたが、無視して床を拭き続けた。寝台の上の女性は相変わらず無表情で、一言もしやべらなかつた。

そのとき、階段を二、三人の将校らしい中国兵が、なにやら談笑しながら上がって来た。初めは何やら話し合っていたが、そのうちに私に気付いたのか、その

中の一人が私に近づいて来て、私の襟首をつかんで引きずって、そばにあったソファの上に私を引きずり上げた。私はどうしようもなく、ただ亀の子のごとく手足をばたばたさせるばかりだった。彼らは「ホックス」と何やら笑いながらしやべっていたが、私はただ大声を出して「やめて！ やめて！」と叫ぶだけしか抵抗がでなかった。

そのような状態のまま、随分と時間が経っていったように思ったが、実際は四、五分ぐらいのことだった。そのうちに、とんとんと階段を上がって来る足音がした。ふっと部屋の入り口に、美しい成熟した日本の女性の姿を見た。その人は、緑色の柔らかそうな生地ワンピースを着ていて、踵の高いヒールの靴を履いていた。一瞥をただけですべてを察したかのように、私を押さえつけていた将校の手を振りほどいて、「ダンス！ ダンス！」と言いその将校にしなだれかかりながら、私に向かって「お嬢さん！ 早く！ 早く逃げなさい」と言ってくれた。私はすぐに立ち上がって、泣きながら階段を駆けおりた。

後に思い出しても、どうやってあの家から外に飛び出したか分からず、記憶に残っていない。これが戦争に負けたということなのか。敗戦国民の運命なのかと考えると、悔しきで涙が止まらなかった。走って家に戻る途中で見た青い空だけは、記憶に鮮明に焼きついている。空は何事もなかったかのように晴れ渡っていたが、私の心の中は灰色で埋まっていた。屈辱で体の震えが止まらなかったが、家に戻ってもこのことはだれにもしやべらなかった。張進及は「ヨシコさん！ ソンチー（怒っている）」と言って笑っていた。

「九死に一生を得る」とはまさにこのことか。あの女性が来てくれなかったら、私の運命はどうなってしまったことかと思うと、かの女性と神仏に感謝せずにはいられなかった。今でも当時のことを思うたびに、心がぞつとして寒気を覚えてしまう。

それ以来、二度と通信隊長は我が家に姿を見せなくなった。

三 父の死

八路军と国民党中央軍が、四平の市街で戦闘を交え

ているときに、父が心労が高じて倒れた。私たち家族は一生懸命に看病したが、そのかいてもなく遂に帰らぬ人となった。昭和二十年十二月二十六日のことである。

葬式らしい弔いもできずに、家族だけのお別れであった。母と私たち三姉妹、それに姉の五歳になる男子、家族以外は父の親友だったK・I氏一人だけのしめやかな弔いであった。火葬場には、近所からリヤカーを借りて、父をそれに乗せてみんなでひいて行くことになった。その日はまたものすごい寒波で、四平の中心街の街路樹の枝という枝にはびっしりと樹氷の花が咲いていた。父は生前、樹氷が大好きで、樹氷の咲く寒い日には、よくカメラを片手に朝早くから樹氷を撮りに出掛けていた。写真展などには、何回も入賞しているほどの腕前であった。火葬場に行く途中の樹氷はまことに見事なもので、樹氷の好きな父が見たら、この世での見納めにふさわしいものだとい喜んだことだろうし、樹氷側からは、樹氷を愛してくれた人を見送るために美しく咲いたのだと言っているようだった。父にとっては、何よりの見送りとなった。

戦闘の最中だったので、街中でははじけるような弾の音が散発的に聞こえてくるが、緊張していたので恐怖心はなかった。その中を、みんなで交代でリヤカーをひいて火葬場に向かった。

火葬場といっても、窠が一つあるだけで、椅子一つも置いていないただの土間であった。みんなは立ったままであった。そのうちに、厳しい寒気のために足の爪先のほうからだんだんと感覚がなくなり、それが体の上に伝わってきた。そのうちに膝頭ががたと震え始めて、どうにも止まらなくなった。火葬中は、足踏みをし続けていたが、待つこと約三時間、そのうちに夕暮れも迫ってきて周辺が薄暗くなってきた。暗くなってくると、遠く市街から聞こえてくる銃撃戦の弾の音だけが不気味に響いてきて、不安が一層つづいてきた。

母はたまりかねて、中国人の隠坊に「快快的」(早く、早く)と言うと窯の鉄の扉をガチャンと開けて、太くて大きな火掻棒のようなものを火の中に差し込ん

で、まるでバーベキューのごとくにかき回して、再びガチャンと大きな音をたてながら扉を閉めた。なにかしら不服そうな動作で、私たちにもその露骨な態度がありありと見えた。

それから少し経ってから、やっと扉が開けられて、まだ炎を出して燃えているばらばらにされた骨が引き出された。そのとき何を思ったのか、父の親友のK・I氏が皮の手袋を脱いだ。そしてまだ火の消えていない骨の上に自分の手をかざし、せわしく両手をもみ始めた。私は啞然となつて見てしまった。この行為は死者への冒瀆ではないか？ いかにも寒いからといっても、こんな非常識なことをするのは。今まで父のごく親しい友人と思つて尊敬をしていたのにとすると、怒りとも違う悲しみが襲つてきて、涙が止まらなくなった。親友であつたといつても、亡くなつてしまふとまったくの他人となることを思い知らされた。父との長いお付き合いの中で、私たちも今までは「おじさん！ おじさん！」となじみ親しんできた人だけに、裏切られた気持ちとなり、その日からK・I氏を見る目が変わ

つた。陽はとつぷりと落ちて暗くなった道を、くさぐさになった父の骨を胸に抱きかかえて、積もつた雪音をきしませながら帰路に着いた。みんなそれぞれの思いで重い足どりとなつた。

それからもつらい寂しい日々が続いたが、幸いにも食べることに困らなかつた。八路军が駐屯しているときにも、豚肉や野菜などを支給してくれていたし、中央軍に代わつてからもメリケン粉や砂糖などは潤沢に配給してもらつていたので、他の居留者のように売り食いをすることもなく、落ち着いた生活をしていた。いよいよ日本への引揚げが決まると、リュックサックを準備し、規定されたとおりに下着三枚、洋服三組、タオル三枚など真面目すぎるほど、規定に忠実に準備していた。

四平を離れる日が近づいてくるに従つて、今度は我が家の争奪戦が始まつたが、このことは思いもよらないことだった。見ず知らずの男女がやつて来て、まだ私たちが住んでいるのに、大声を出してこの家をだれが取るかの騒ぎが起こつた。話し合いの内容はよく分

からなかったが、玄関先に布団などの寝具を持ち込んで居座られる状態となった。上海マダムと言いたくないが、やり手婆のような者が激しく言い争う、殺気立った場面を何度も見るようになった。

いよいよ明日は我が家を立ち去るといふ晩には、張さんが張さんの部下たちも交えての盛大なお別れパーティーを開いて、別れを惜しんでくれた。張さんは蘇州の人だが、実に良い人であった。あの敗戦後の混乱期に巡り会うことができたということは、私たちにとても幸いなことで、今になっても当時を思うと心暖まってくる。

四 四平からの引揚げ

四平からの引揚げが開始されたのは、昭和二十一年の七月だった。総員二万三千余人の日本人は、大隊、中隊、班にそれぞれ組分けされて、全部で二十一ヶ大隊に編成された。青年学校だった建物の北側広場に集結し、所持品・携行品などの検査をされた後、四平駅から輸送列車に乗り、長年住み慣れた四平を後にした。列車は無蓋貨車で、強烈な夏の日に悩まされながら揺

れる貨車に身を任せた。中央にリュックサックなどの荷物を積み上げ、それを枕代わりにしてみんな横になった。やつと横になると、今までの疲れが一度に出てきた。ついうとうとしながら、昨日までのことが頭に浮かんできた。

満蒙曠野に雄大な夢を持つて青春を懸け、寝食を忘れて地盤を築いた人たち、時代の流れの中に渡満をして来た人たち、満蒙の地で生を受けた私たちのような人々、いろいろな生い立ちはあるだろうが、だれもが第二の故郷と信じ切つて過ごしていたのだった。それが、一夜にして敗戦国民となり、厳しい運命にもておぼれて、今、ここに無一文となって放り出されているのだ。運命とは言え、諦めのつかない事実である。みんなの心情はどうであろうかと考えると、自然に涙が出てきた。

ふと、四平に立ち寄った与謝野寛と晶子の詠んだ歌を思い出した。

寝て聞くは 蒙古の口の四平街

沙をしずむる むら雨の音

曠野なる 蒙古の築地一陽に

寛

物見つくれど 見んものはなし

ねじあやの 地平の線にいたらず

其処 さへはては白き砂山

晶子

そのとき、貨車が突然に急発進した。「がたん！」と大きく揺れた瞬間に、横になっていた母の胸に、大男がリュックサックを抱えたまま、「どすん！」と尻餅をついた。母は、「ぎゃ！」と叫んだとたんに鼻から血が「ぷー！」と吹き出し、「うーん」とうなっていた。大男は平身して謝っていたが、謝っても仕方のない不可抗力のこと、だれを怨みようも無いことであつた。幸いにも、隣の貨車に我が家の主治医が乗っていたので、すぐに行つて事情を話して来てもらった。診断の結果は、「明日の朝まで変わりがなかつたら大丈夫でしよう！」ということ、その夜は一睡もできずに看

護したが、幸いに異常は見られずほつとした。もしも母が死んでしまつたら、この貨車から降りて四平に残ろうと姉が言い出したので、皆で決心していた。母は、骨は折れずに肋骨の一番下の部分が曲がつている、という診断だつた。

錦州駅で貨車から降り、錦州の捕虜收容所に收容されることになつた。途中の道すがら、私たちは母を抱えて歩いた。荷物はみんなで手分けして持ち、ようやくのこと、收容所にたどり着くことができた。收容所は一軒の家で、すべて板張りになつていて、たった一枚だけ畳が残されていたので、そこに母を寝かせた。

幸いなことに、偶然にもそこで親せきの人に巡り合つた。母の様子を見たその人は、整骨院の先生を知つているからと言つて、すぐに先生を連れて来てくれた。その先生の治療のお蔭で、母も日に日に快方に向かつて、荷物を持つことはできないが、なんとか自力で歩けるようになってきた。

いよいよ乗船の順番がきて、錦州から葫蘆島に向かつた。葫蘆島では、引揚船に乗り込む前に荷物の検査

があった。大きな布製の袋を抱えた二人組の男がいて、好き勝手に品物を物色して、めぼしい物は有無を言わずにその袋に投げ入れていた。ここまで苦勞をして持って来た姉の丸帯やら、大事にしていた洋服など全部取られてしまった。

乗船の許可がだされたときは、もう既に夕暮れとなっていた。引揚船は船名を「トーマス・ハートレー号」というタンカー（油送船）で、大きな船だった。

渤海湾に太陽が沈むときの光景はまことに美しいもので、いまだに目に焼きついている。岸壁と船との間に、まるで卵の黄身がとろとろと流れ、太陽がただれてほしいだけに溶けていくようにくずれていった。あのときのすさまじさは、何かしら不吉な予感を与えるようで、今でも黒ずんだ思い出である。

船倉は、上の段と船底とに分かれていたが、幸いにも私たちは上の段に割り当てられた。船底は甲板から見下ろすと、大人の人が小人ぐらいにしか見えないような深いところで、すごいという記憶しか残っていない。

私は、幸いだったかどうかは分からないが、女学生時代に准看護婦の免状を頂いていたので、船内医務班のお手伝いにとの指示で、医務室に詰めることとなった。船内に収容されている人々には申し訳なかったが、上甲板の医務室で、シャワー付き・ベット付きの待遇となった。

ある日、一人の青年が膿板器いっぱいに喀血をした。私は、そのときは結核の恐ろしさも知らずに平気で洗面所で血を流したりしていたが、そのせいなのか福岡に引き揚げてから私も結核にかかってしまった。

またあるときには、病室である患者の熱を計ったり脈をみたりしていたが、その患者は片足が壊疽で、五日後に亡くなってしまった。その日の夕方に水葬が行われたが、全身を新しいシートで包み丸太棒のような状態にして、船の舳先近くから傾けた杉板の上にのせてごろごろと転がし、どぼんと海の中に落とすのであった。あまりにもあつげなく、そしてあまりにも衝撃的で、哀れ過ぎてしばしばうぜんとなっていた。人生のはかなさを感じていた。もう少しで日本

の地を踏めるのに、なんと不幸な人であろうかと思うと、胸が痛くなりしめつけられる思いだった。船は汽笛を鳴らし投げ落とした遺体の周辺をひと回りして日本に向かつて航行を続けた。その人の一生は、骨も拾ってもらえない水葬で終わってしまったのだった。

「水葬」

杉板するする、四十五度の葬

死の重さ 音の軽さや夏の泡

抱く骨も なくてくずれる西日照り

五 引揚後の生活

船は東舞鶴港に入港した。下船するとすぐにDDTのシャワーを浴びた。現在流行の谷村新司の持ち歌の「いい日旅立ち」の歌詞にある「ああああ、日本のどこかに、私を待っている人がいる！」ではなく、どこを見回しても、私たちの家族を待っている人などはいなかった。引揚げに関するいろいろな手続きをして、東舞鶴駅から汽車に乗り、京都に行った。京都駅のホームでは、向かい側に来る列車に乗るらしい若夫婦が、赤ちゃんを抱いて立っていた。女の人はきれいな服を

着ていたし、赤ちゃんには真っ白いベビー服を着せていた。私たちの姿を見ると、「ああ引揚者よ！」と吐き捨てるような言い方で話し合っていた。乞食同然の服装で、死ぬ思いをしてここまでやって来て、今やっと日本の土を踏んでいるのにと思うと、その悔しさが胸の中を駆け巡った。そのときのことを思うと、今でも腹が立ってならない。

京都から博多に行って、ひと晩博多の引揚援護局に泊めてもらい、翌日、父の姉の嫁ぎ先である福岡県早良郡のお寺を目指して歩いた。やっとお寺を探しあてたが、いくら恩情あるお寺でも、突然に私たち家族五人が飛び込んで来たので、えらく驚き、大変に迷惑そうであった。

悪いときには悪いことが重なるもので、その家の二人息子の戦死公報が同時に入ってきたので、家中大騒動の最中であつた。私たちは、母屋には寝かされずに、庭の片隅にある薬師堂の内部を片付けて、その中で寝泊りするようになった。わずかに四畳半ぐらいの広さのお堂で、中はもちろん板張りである。一步外に出る

と、桶いを伝つて湧き水が絶え間なく流れていて、自然がいっぱいであった。ときどきは猿が下りて来るというぐらい静かな田舎のお寺であった。

母の里は、そこから約半里ばかりの内野という所であった。もう母の血縁の人はいなくて顔を出すのを遠慮していたが、一度行つてみようということになった。実家は昔、黒田藩の御殿医をしていた家なので堂々とした家で、幾つも部屋があつたが、やはり人情は冷たかつた。悪いことに、ここにも新京から引き揚げて来た四、五人の家族が既に住んでいていづらかつたが、泊まることになった。私たちは、久しぶりに畳の上で寝ることができて幸せを感じた。その日は何十時間寝ただろうか。ひねもす鮪のように寝てばかりいた。目が覚めればお百姓の家に行つて、帯締めや帯揚げを持つて行き、「何かお野菜を分けて下さい」とお願いして歩いた。軒先にはタマネギがずらりとぶら下がっているのに、わずかばかりの野菜しかくれなかつた。しかしそれでも文句は言えずに、感謝をしながら帰つたものだった。その惨めさを嘔みしめながら、泣くに泣け

ない心情で、この先どうなるのだろうと暗い気持ちになつた。あの惨めさは身に染みている。

お寺でのお葬式やごたごたが収まつた後に、お寺に戻つた。姉とその子供は、嫁ぎ先の阿蘇の家から舅が迎えに来て、そちらに行つた。残つたのは母と姉と私の三人になつてしまつた。

伯母から、お寺から二キロメートルばかり離れた所の農家が家を貸してくれるから、そつちに行くようにと言われ、その配慮に感謝して行くことにした。しかし、そこは四方が田畑に囲まれている大きな農家であつた。その中に入るまでは、あんな大きな家に住めるのだと嬉しくなつた。しかし入つてみると、なんとそこは農家の納屋であつた。壁は荒壁で、辛うじて畳が四枚あつた。傍らには農機具が置いてあつた。お寺から体よく追い出されたのだと分かつた。

しばらくすると、阿蘇に行つた姉から、熊本に手ごろな家があるから来ないかという連絡があつた。有り難や、家があるならばどこにでも飛んで行くとの思いで、熊本に行くことにした。

熊本で、引揚げ以来初めて家らしい家に入った。一年ぶりのその嬉しさは、筆舌には尽くせない喜びであった。そこは五軒長屋でお風呂もなかったが、小さな庭と二部屋があった。まさに天国であった。しかし、熊本弁が全然分ならず、お隣のおばさんが話しかけてくるのだが、さっぱり分からなかった。

ある日のこと、庭で草取りをしていたら、おばさんが顔を出して「今日は、いさぎいおがま出しですなあ！」と言われたので、なんのことかさっぱり分からずに、つい「どこかにガマがいるのですか？」と聞くと、笑いながら「おがまだしというのは、頑張っているのですね」ということだと笑いながら教えてくれた。熊本弁を覚え込むには随分苦労をしたが、もう今では熊本弁しか使えなくなった。

敗戦によって本当にいろいろな目に遭ったが、土壇場になるとだれかに助けられ、運良く苛酷な運命をすりすりすると身を交すことができたのも、亡き父やご先祖様のご加護だったと神仏に感謝せずにはおられません。

私たちの運命を狂わせてしまった戦争が憎い。そして敗戦国民の惨めさは、全国民がそれぞれの運命の中で痛みとして体験したことであろう。

戦争はどんな理由があってもしてはならないし、しなければ敗戦という惨めなこともない、と身に染みて感じている。

英霊の 言葉美し苔むして

